

平成 23 年度鹿児島大学法科大学院 B 日程入試小論文問題の出題趣旨

設問 I

【出典】大庭健『善と悪—倫理学への招待』（岩波書店，2006）第 5 章 美德と悪徳—呻きの沈殿と，共感，第 1 節「個人的徳目とシステム」136 頁 1 行目～145 頁 9 行目。見出しのほか，文章の一部を省略している。

【出題の意図】

倫理学の手ほどきをする著作の一部，「間柄いかんによって支えられもすれば痛めつけられもする人間のあり方への気づかい」について考えている部分を読んで，作者の主張を正確に読み取ることを求めるとともに，読み取った内容を的確に再構成して表現することを求めている。

問題文は，冒頭に作者の考え方が簡潔に要約されている。この作者の考え方に対する仮想の異論（近代化した社会ではシステムによって徳目は代行され，徳性の機能は終焉する）との対話を通してさらに作者の考え方を深く伝えるという文章の構成になっている。全体の構成を把握し，作者が異論として対置している考え方を理解した上で，作者の徳目についての考え方（作者の倫理学）を適切にまとめることを求めている。「読解力」「表現力」を試すものであるが，2 つの考え方を適切に対置できているかで評価が分かれる。

設問 II

【出典】 資料（グラフ及び表）の出典は，試験問題のそれぞれの箇所に記載してある。再整理したものとして，<http://www.dpj.or.jp/news/files/1shohiseisan.pdf>，鈴木宣弘「食料・農業・農村政策の現状と展望」『共済総合研究』59 号 7 頁（社団法人農協共済総合研究所，2010 年）参照。

【出題の意図】 設問 II は，与えられた資料（グラフ及び表）を読み解く力，一定の事実について，その原因を探究する力・対策を考察する力，それぞれの要素を明確に総合する力（論理的な思考），を評価するための問題である。

わが国の農業問題については，現状・原因・対策等がさまざまに報道されている。本問は，そのことについての知識を問うものではない。提示された資料を始点として，それを分析し，論理的な考察によって，問われている「原因・対策を」を導いていくことが求められている。したがって，図表に即した分析がなされておらず，既に知られている事柄に対する自己の見解が表明されているような「解答」は，低く評価した。

問 1 (配点 20%)

図表から生産量の低下は読み取れる。価格(単位あたり:総売上げではない)の変化,したがって「価格の算出方法及びその結果」を説明できているか,が問われている。

問 2 (配点 80%)

「利潤はおおよそ,収入(農水産物(国産)の帰属額)－支出・費用として求められる。利潤がマイナス傾向であるのは,収入が「減」(価格・量の低下)し,支出・費用が「(相対的に)増」していることが原因と考えられる。したがって,対策は,収入を「増」し,支出・費用を「低下」させることである。」

以上のような枠組みに従って,与えられた資料を分析しながら,検討を進めていくことが求められる。

- ・支出を「減」する具体的な対策としては,まず経営規模の拡大による経費(支出)の相対的「減」が考えられよう(表からも,大規模経営においては利潤はプラスである)。
- ・収入を「増」する対策としては,販売「量」を増やすことと,価格を上昇させることが考えられよう(なお,「量」を増やすための対策として,「価格」を下げることは,収入を「増」することと矛盾しないか,検討が求められる)。